

平成24年度
広島市専門家評価
評価報告
(五日市南中学校)

平成25年3月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会

評価報告について

このたび、広島市学校評価システム専門家評価「評価委員会」（以下「本委員会」という。）では、専門家評価（専門家による第三者評価）を実施し、ここに評価報告を取りまとめました。

この専門家評価は、「広島市学校評価システム第三者評価検討会議」の最終報告書で提言された実施方法等に基づいて実施しています。

専門家評価は、各学校の学校経営や教育活動の改善に向けた取組とそれに対する教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して意見・提言を行うことによって、学校評価の目的を果たす役割を担うものです。そのため、本委員会は、学校における自己評価活動（計画・実践・評価・改善）について専門的見地からより客観的に評価することと、学校に対しては学校経営や教育活動の改善について、また教育委員会に対しては学校への支援について、意見・提言を行うことを役割としています。

本委員会では、今年度、専門家評価を希望した広島市立小学校1校と広島市立中学校2校を評価対象校に決定し、実施しました。本委員会において、学校の状況に応じて評価の目的や評価する項目を定め、学校経営や学習指導等に専門性を有する学識経験者及び退職校長を含む評価チームを編成して、昨年10月から学校への訪問調査等を行い、その後、学校と報告案に基づく協議を行い、この評価報告を作成しました。

この評価報告にある意見・提言を踏まえ、学校での主体的な学校経営や教育活動の充実・改善に向けた取組が進むとともに、学校の取組が促進されるよう、教育委員会の適切な支援が行われることを期待します。

平成25年3月

広島市学校評価システム 専門家評価

評価委員会 委員長 林 孝

副委員長 曾余田 浩史

副委員長 高妻 紳二郎

I 評価目的

五日市南中学校が取り組んでいる「いいところ見つけ！カード（ほめ・励ましカード）」の活用や小学校等と連携して生徒をはぐくみ育てる教育活動の充実について評価し、その充実・改善に向けた意見・提言を行う。

II 評価項目

- (1) 生徒の状況
- (2) 学校運営の状況
- (3) 授業の状況
- (4) その他の教育活動の状況
- (5) 環境・施設の状況
- (6) 家庭・地域と学校の関係

III 評価方法・作業

1 評価手法

今回の評価方法としては、「II 評価項目」に関する情報を、学校及び教育委員会から提供を受けた資料、管理職員及び教職員からの聞き取り、授業等の観察によって収集し、それらを総合的に分析した。

2 データ収集方法

データ収集対象	方法
学校管理職員	聞き取り、資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）
教職員	聞き取り、授業等の観察
生徒	授業等の観察、グループインタビュー
その他（教育委員会）	資料提供（学校評価に関するもの、生徒の現状を把握するもの等）

3 作業の経過

時期	内 容	実施主体
4月	・ 専門家評価実施の通知、希望の受付	教育委員会
5～9月	・ 参考資料の収集・分析、対象候補校の選定	教育委員会
10月	・ 参考資料の収集・分析、対象候補校からの聞き取り (10/9) ・ 対象候補校の選定 ・ 評価委員会 (評価対象校の決定) ※ 電子メールによる会議 ・ 評価対象校から希望等の意見聴取 (10/24)	教育委員会 評価委員会
11～12月	・ 評価委員会 (評価目的、評価項目の決定、評価チームの編成) ※ 電子メールによる協議	評価委員会
1/16	・ 評価チーム会議 (評価計画、今後の予定) ・ 学校訪問調査 (教職員からの聞き取り、授業等の観察 他)	評価チーム
1～3月	・ 評価チーム会議 (評価報告案作成) ※ 電子メールによる会議 ・ 学校及び教育委員会から評価報告案作成に向けた意見聴取 ※ 学校訪問による意見聴取 (2/28)	評価チーム
3/15	・ 学校及び教育委員会から評価報告案に関する意見聴取	評価委員会
3月	・ 拡大評価委員会【評価委員会・評価チーム会議】(評価報告案他)	評価委員会・ 評価チーム

4 評価者 (評価チーム)

チーフ(評価委員)	曾余田浩史 (広島大学 大学院 教育学研究科 准教授)
評価専門委員	財津 伸子 (比治山大学 非常勤講師、元 中学校長)
評価専門委員	瀧口 典子 (元 中学校長)

IV 評価報告

1 評価・分析結果の概要

【総合的な状況】

五日市南中学校は「チャイムのない学校」として35年目を迎えた。生徒たち（特に生徒会）は五日市南中学校がノーチャイムであることに誇りを持ち、伝統を守ろうと思っている。また、教職員は平成20年度からひろしま型カリキュラムの「言語・数理運用科」の研究・開発をおこなってきたが、この取り組みを続ける努力をしている。

しかしながら、現在の1年生と2年生の一部は、小学校4・5・6年生で続けて学級がうまく機能しない状況を経験している。個々の生徒は基本的な生活を崩していないが、集団での行動や基本的な学校生活習慣が十分に育っていない、あるいはその実行に意義を感じていないようである。教員は、学級がうまく機能しない状況を経験した生徒の課題として、教師に対する信頼感が薄い、教師の存在価値を深くは感じていない、学校生活の基本的習慣が育っていない等の課題を感じている。

これらの生徒への指導について、校長の方針のもと、「ほめる」ことにより「認めていることを伝え」、自己肯定感を高めるよう取り組んでいる。校長の教育哲学がよく浸透し、教職員もそれを自分のものとして取り組もうとしている。

校長は、地域との連携、小学校との連携、保護者との連携を図れるよう、地域、小学校、保護者に発信している。昨年度の「地域公開授業研究会」など一定の効果は出ているが、生徒の指導に連携して取り組みたいという校長の期待する連携はまだ得られていないようである。また、校長は小学校との連携を特に強めたいと考えているが、小学校からの反応が乏しいと感じている（今回の訪問では、小学校の考えはとらえることができなかった）。

現在、生徒を受容することに主眼を置いて取り組んでいるが、その次のステップが見えていない。これまで何とか体裁をなしているが、次のステップの指導、とりわけ学級経営ないし生徒指導がないと、再び崩壊状況を引き起こす可能性があると感じられる。

【生徒の状況】

- ① 学校は静かに正常な日課が実施されている。大きく集団を乱す行動はなく、服装や行動に目立った課題のある生徒は見られなかった。ただし、朝会や授業の中では、集中が浅く、表層的な活動を保つ程度になっていることが多く見られた。
- ② 生徒一人一人は、容儀等がほぼ整っており、生活が崩れた感じはしない。個人的には基本的な生活習慣を身につけているようである。家庭の教育力はあるということであろう。教師も同様にとらえており、集団での生活・行動面で課題があるととらえている。
- ③ 3年生は全体的に落ち着いており、かかわり方や表情も柔らかかった。しかし、1・2年生では授業に集中していない者が多い。
- ④ 1年生、2年生とも、小学校での状況を入学前に十分把握できず、入学式での態度でその実態に驚いた時点から取り組みを始めた。2年生は、1年生の時に少人数学級編成(6学級)で細かく指導してきたが、2年生で通常の編成(5学級)になり、指導の焦点化が難しくなったままである。

- ⑤ 生徒会執行部は、五日市南中がノーチャームであることに誇りを持っている。前執行部は、昨年1年間遅刻をなくす取り組みをしたことに手ごたえを感じていた。学校の現状について、遅刻者が多く、あまりよくないと感じており、お互いに勇気をもって注意し合えば学校はもっとよくなると考え、学校を変えていく意欲を持っているようである。新執行部も前向きでリーダーシップも執れる力を持っていた。全校生徒を前にして発言力やまとめる力がある。教員の指導の賜物と思う。

【学校運営の状況】

- ① 校長は教育理念や理想を教員に語り、教員もそれを受けとめ具現化、実現しようと頑張っている姿や意識が感じられた。生徒の課題をとらえ、手だてを工夫しながら、一致協力して指導してきたことと、指導に取り組む姿勢はすばらしい。
- ② 校長は、各教職員を適材適所に配置した組織作り（「木の癖組だ」）により、個人の指導力を発揮させようとしている。主幹教諭（本校7年目）が学校全体を把握し、指導の具体的な面をリードしている。本校経験が長い教諭が教務主任、進路指導主事、研究部長であり、生徒指導主事は2年目の教諭が担当している。3年生は進路決定の充実を意識した教諭構成にしている。1・2年生にそれぞれ、新規採用者、教職経験2年目など経験の少ない教諭と、病休（病休明け）者など現在の生徒に継続的に接した期間が短い教諭がおり、基本的な学校生活習慣を指導していかなければならない現状では、人手不足であると感じている。
- ③ 校長は各教職員へ親和的に接し、経営方針を日常的に発信しているようである。教職員は、生徒の状況に指導の困難を感じているが、閉塞感は感じられず、校長の方針を理解し、雰囲気は明るく、発言も建設的なものが多い。また、公開授業研究会を開くことをプラスと評価していた。
- ④ 各学年団において、みんなで子どものために考えようという姿勢がある、先を見通して心配な点は必ず事前に検討する、小さなことであってもみんなで動く等、教員間によい雰囲気があると教員は感じている。学校教育目標を昨年度「生きることから学べるひろしま型教育をめざして～思考力・判断力・表現力を育成するひろしま型キャリア教育を通して～」から本年度「『主体的に学ぶ』ことによって『確かに生きる力』を培う生徒（学生）の育成」として、「学ぶことと生きることの一体化」した生徒を育てることを目指している。学校教育目標の達成をめざし、「ほめ言葉・励ましの言葉」カード、「いいところ見つけ！」カード等を活用した開発的生徒指導を推進することが、本校の最も中心的な取り組みである。ただし、この取り組みは、生徒や教師の気づきに立脚するものであり、偶発的な要素をもっている。
- ⑤ 1年生、2年生について、今後の生徒の成長や指導の方向性について、教師も見通しが持っていないのではないかと。教頭、各主任、教諭から、学級経営の改善や、教科経営等について課題や研修にどのように取り組みたいかの考えは、多くは聞かれなかった。

【授業の状況】

- ① 生徒は教師の指示には従い、ほぼ全員がノート・教科書などを机に出している。3年生は集中して学習に取り組んでいる。しかし、1・2年生では集中していない者が多く、取り組んでいる者もいるが、学級全体での学習意欲は高いとは感じられなかった。

そのため学級全体での集団思考が難しいと感じた。

- ② めざす授業像については、学校経営計画には学校教育目標に迫るために「ひろしま型カリキュラムを活用して言語活動の充実を図る」としている。
- ③ 見学した授業では、板書での本時のめあて（目標）の提示が見られなかった。グループ学習、全体での話し合い等、生徒が活動する場面が少なく、教師による説明が中心である。導入や教材に新鮮さを感じられなかった。学級の意見交換も一問一答的で、相互に意見を言って深めていくような場面はなかった。
- ④ 生徒の表情をしっかりと見ていない教諭が、1・2年生の授業で数人見受けられた。
- ⑤ 教師は、生徒たちの学習（成績？）への意識は高いと感じている。

【その他の教育活動の状況】

- ① 「学校適応問尺度」「学級力アンケート」を用いて学級づくりの意欲付けや自己評価を行わせている。
- ② 学校行事をもっと生徒の取り組みに任せたいが、時間に余裕が無いため、つい教師主導になりがちである、と教員は感じている。
- ③ 暮会は、各係が授業や掃除について、グループの成員の観点別評価を読み上げることが中心であった。

【環境・施設の状況】

- ① 個人ロッカーから荷物がはみ出していたり、床に落ちていたりして整理整頓された感じがしない。教室の後ろにごみが落ちていたりして汚い。担任の指導もあるが、生徒たちに工夫させ、整理整頓を呼び掛けるポスター等を掲示するようにすれば、もう少し整う教室もあった。
- ② 教室内は生徒を評価した掲示物が多い。生徒の取り組みが感じられるもの（学級活動、生徒会活動、係からの連絡等）が少ない。
- ③ 古い行事の記録（5月や6月のものも見られた）は更新したほうがよい。
- ④ 一階の廊下は、10センチくらいの段差が多くあり、校舎のつくりを理解していないとつまづくことが多そうである。

【家庭・地域と学校の関係】

- ① 校長の話では、地域は公開授業研究会などへの参加はあるようである。
- ② 家庭での学習のさせ方について保護者対象の講座を行う計画である。

2 意見・提言

評価チームは、上記の評価・分析結果に基づき、五日市南中学校及び教育委員会に対して、次のとおり意見・提言する。

(1) 五日市南中学校に対して

【カードの活用について】

- ① 現在の自己肯定感の育成の手立て（「ほめ言葉・励ましの言葉カード」「ええじゃんカード」等）は、生徒や教師の気づきに立脚するものであり、偶発的な要素をもっている。そのため、生徒の中に、自己肯定感を確実に育てるには、恒常的な方法（たとえば、生活記録や日記ノート等、毎日の自分の学校生活を振り返り教師の認めを受けられるもの、委員会や係等の活動記録や新聞の作成等定期的に活動を公開できるもの、ボランティア手帳等自主的な取り組みを記録し周囲の認めを得られるもの、継続的に学級ごとに交代して取り組む活動等）を加えることが有効ではないだろうか。
- ② 机で見つける「ええじゃんカード」は一面的・表面的ではないかと感じる。先生が生徒とともに活動する機会を多くして、生徒にも先生の「ええじゃん」を多く見つけてほしい。
- ③ 1年生・2年生には、評価によって次の行動の意欲を高めるという方法は長期間効果があるとは考えにくい。1年生・2年生は自分が実感を伴う評価によって、はじめて評価されることを受け入れるのではないか。日々の生徒の取り組みを継続的に丁寧にポートフォリオにして気づかせる等の方法を加えてはどうだろうか。

【学級経営・生徒指導について】

- ① 「学級力アンケート」等で取り組みを評価することは、評価の視点や成果の現状を生徒にはっきり把握させる上で効果があると思われる。しかし、それが生徒の意欲に結びつくかは疑問が残る。生徒は自分が取り組んだことが明瞭に足跡となって残ることの方が成果を自己評価し、次への意欲を持ちやすいと考える。
- ② 学級づくりについては、たとえば係の活動内容にかかわる掲示コーナーを設けたり、活動の目標や成果を生徒自身の言葉で表現させたりというようなことを多くしてはどうだろうか。活動の継続を記録化することで、各生徒の良さも恒常的に評価されていくことに結びつくのではないか。
- ③ 校内人事等は、校長の深慮の下で工夫されているが、生徒の現状に対応するには、生徒指導、学級経営等の充実に関わりつつ重点化が有効ではないか。
- ④ 「学ぶことは生きること」という理念は、素晴らしい理念である。しかし、社会性が未熟な生徒には理解しにくいかもしれない。「学ぶこと」「生活すること」を具体的に指導していくことが必要ではないか。つまり、授業づくりと生活の充実の両面を具体的に進めることが必要ではないかと考える。

【授業について】

- ① 生徒が集中できない状況ではあるが、その生徒に学習をさせることができる授業力の向上が急務である。全校で一致して取り組む授業づくりの手だて（または授業のルール）などがあるとよいのではないか。

- ② 生徒は勉強することの必要性は感じているようである。その気持ちに十分に答える学習指導をすることで、教師への信頼感が生まれるのではなかろうか。生徒に「できる・分かる」を実感させ、学力を伸ばす授業をすることが有効ではないか。

【その他】

- ① 1・2年生は、挨拶や集団での行動については、社会性の未熟さが感じられる。自分の行動の社会的な意味について学んでいくことが必要ではないか。道徳の時間や学活等で、ロールプレイやグループエンカウンターなどの手法を取り入れた学習などを取り入れた指導を厚くすることが有効ではなかろうか。
- ② 3年生は落ち着いており、学力、行動力も身につけている。生徒会執行部も生徒のリーダーとして育てている。生徒会を中心に、生徒の自治能力を育てていく取り組みを積極的に進めるとよいのではないか。
- ③ 教室環境を整えるために、学年等で共通した取り組みをもっと進めるとよいのではないか。掃除用具入れはカーテンか扉をつけたほうがよいと感じた。整理されていないところやほこりのついた箒などが見えると落ち着かない。また、少人数学級での教室は明るく整備（掃除）される必要がある。

(2) 教育委員会に対して

- ① 生徒の自己肯定感を高める取組や授業づくりに関する校内研修において、指導主事等が好事例を紹介するなど、継続的な指導が必要である。
- ② 生徒指導の取り組みの核となる教師の配置。
- ③ 小学校から中学校への引き継ぎの徹底について。

何らかの形で、小学校において指導が難しい状況を知っておく方が中学校としては生徒の指導や対応の方途を考えやすい。たとえば、㉞具体的な状態、㉟課題が生じたきっかけ・誘因（或る先生の学級経営への不信から始まったのか、授業力や指導力不足から始まったのか、学年団のメンバーミスだったのか、対応が難しい児童がいてその児童が核となって学級が崩れたのか等の崩壊の誘因の主たるもの）、㊱小学校の取り組みの経緯、㊲保護者の対応やとらえ、㊳その当時の児童の思い等については、中学校としては知っておきたいことである。

教育委員会は、全市の小・中学校へ子どもについての連絡の徹底を指導することと、本学区については、口頭でもよいので、遑って小学校が連絡をするよう指導することが本校への支援になると考える。

